

社会的比較による自己評価と対人関係

大久保暢俊*

社会生活において、社会的比較は普遍的な現象である。他者と比べることにより、人は自らの能力や意見を評価することができる。Festinger (1954) の社会的比較過程理論によると、正確な自己評価を得るために人は他者と比較をする。Festinger (1954) による定式化の後、比較時の認知的メカニズムや動機づけを検討した研究が多く行われた。その結果、具体的な社会集団の中での社会的比較の機能は着目されなくなった。本論では、対人関係の中に社会的比較による自己評価を位置づけることを試みた。次に、社会的比較の適応的意義を検討した Gilbert, Price, & Allan (1995) に基づき、自己と他者を相対評価する第三者の役割について議論した。最後に、社会的比較による自己評価の社会性を考察した。

キーワード：社会的比較、対人関係、自己評価、社会的評価、進化

はじめに

社会生活を営む上で、私たちは様々な他者と比較をする。人生の多くの時点で比較を行っていることは経験的事実であり、人種、性別、年齢を超えて普遍的に確認されている。そのような経験的事実に呼応するように、古くから多くの社会学者や哲学者の思索の中に社会的比較（広い意味での他者との比較）の概念が含まれている。それは、政治学から経済学、さらには社会学や倫理学までに及ぶ (Suls & Wheeler, 2000)。

本論は、社会心理学の立場から社会的比較を理論的に考察する。社会心理学は、個人とその社会的状況との相互的な影響過程を研究する学問分野である。研究対象は多様であるが、人間存在を他者との関係から検討するのが社会心理学の基本的視座である。その中でも、古典的な研究対象の一つが社会的比較であり、Festinger (1954) による定式化以後、多数の実証研究を生み出してきた。

* 人間科学総合研究所院生研究員・東洋大学大学院社会学研究科社会学専攻

本論の構成は以下の通りである。はじめに、従来の社会的比較研究で自明とされてきた「相対的位置の知覚に基づく評価」について検討し、社会的比較が対人関係と密接に結びついた自己評価であることを示す。次に、対人行動と社会的比較の関係に言及した P. Gilbert ら (Gilbert, 1990; Gilbert, Price, & Allan, 1995) の議論を導入する。その後、比較状況にかかわる第三者の役割について検討し、社会心理学の諸概念との関連を示す。最後に、社会的比較の適応的意義について考察する。

相対的位置の知覚に基づく評価

なぜ人は社会的比較を行うのであろうか。Festinger (1954) の社会的比較過程理論では、人は正確な自己評価を得るために社会的比較を行うと仮定している。人間が適応した生活を送るには、自分の置かれた状況や環境をよく知っていることが必要である。それゆえ、自分の周囲の世界や、そこでの自分の行動の可能性について知ろうという動因が個人に生じる。この動因に基づく他者との比較が自己評価の動機づけによる社会的比較と呼ばれている。その後、自己評価の動機づけ以外にも、自己高揚や自己改善などの動機づけが社会的比較に関わっていることが指摘されるようになった (Wood, 1989)。

90年代に入ると、他者との比較を行う際の認知的メカニズムを検討した研究が台頭してきた。社会的認知のアプローチを積極的に取り入れたこれらの研究は、比較判断時のプロセスを詳細に検討している (Buunk & Mussweiler, 2000)。社会的比較を「なぜ」行うのかについて、認知的メカニズム研究を主導している Mussweiler とその共同研究者は「認知的効率性」を指摘している (Mussweiler, Rüter & Epstude, 2006)。もし、他者との比較に頼らずに能力や意見を査定しようとするならば、人は膨大な量の情報を処理しなければならなくなる。運動能力の査定を例にすると、基礎身体能力や様々なスポーツの成績を総合的に判断することで、人は自らの運動能力を知ることができる。しかし、そのような総合的な判断を下すには多くの情報が必要であり、認知的儉約家である人間が常時行っているとは考えられない。一方、他者情報に対応する自己情報のみにアクセスすれば、社会的比較による判断は可能である。たとえば、野球しかしらない友人と比べて運動能力を判断する際、アクセスするのは野球に関する自己情報のみでよい。したがって、サッカーやそのほかのスポーツについての情報を使う必要がなく、認知的な負担が少ないのである。

しかし、動機づけや認知的効率性による説明では、自己評価の基準として「なぜ」他者が用いられるのかは不明である。なぜなら、自己の動機づけに関わる自己評価は、社会的比較以外の方法でも可能であり、そのような方法は社会的比較と同等か、それ以上に用いられているからである (Wood & Wilson, 2003)。また、認知的効率性による説明も、比較他者は自己にとって認知的負荷のかからない情報であるだけで、客観的情報との違いを必ずしも明らかにしない。つまり、自己に関わる動機づけや認知的効率性による社会的比較の説明は、自己評価にとって他者が必要である理由や、他者情報それ自体が有する特徴を明らかにしない。換言すると、これらの説明は他者存在の特異性を明確にしないのである。したがって、これらの説明を採用すると、診断性のある客観的情報よりも比較情報を

人は重視する実験結果 (Klein, 1997) や、当該の比較領域に関連のない属性の他者を比較相手として選好する実験結果 (Miller, 1984) などが解釈不能になってしまうのである。

他者との相対的位置の知覚に基づく評価が社会的比較の基盤である。したがって、社会的比較は本質的に自己評価のプロセスに位置づけられる。これは、どのような動機づけであっても変わらない。自己高揚的な社会的比較を例にすると、他者と比べて相対的に高い位置に自らの遂行や特性を知覚し、自身を肯定的に評価することが、自尊心の維持や高揚につながる。また、認知的効率性の説明を採用しても、自他の相対的位置の知覚に基づく評価が結果としての自己評価に影響することは自明である。したがって、他者との相対的位置の知覚に基づく評価は、比較の目標や内容にかかわらず普遍である。

しかし、相対的に位置づけられる自己や他者の関係は一様ではない。Miller, Turnbull, & McFarland (1988) は、社会的比較による自己評価を「普遍的な評価 (universalistic evaluation)」と「個別的な評価 (particularistic evaluation)」に分類し、個別的な評価を可能にする比較他者を実験参加者は選好することを明らかにした。普遍的な評価とは、一般的な他者の中における相対的位置に基づいた、抽象的な自己についての評価であり、最終的に他者とは独立の自己認識に関連する。それに対し、個別的な評価は、特定の他者との相対的位置に基づいた、他者との具体的な関係を反映した自己評価であり、集団内における社会的な立場の査定に関連する。Miller et al. (1988) の実験結果は、他者との相対的位置の知覚に基づいて自己評価をする際、自己と他者の関係が一般的であるか、または特殊であるかを人は区別しており、特に後者を重視していることを示している。

対人関係と社会的比較

自他の相対的位置の知覚に基づく評価、すなわち社会的比較による自己評価は、自他の対人関係を反映した評価である。たとえば、比較他者より能力が優れていれば、優劣関係において自らは優位者となる。また、比較他者と意見の相違が大きければ対立者となる。これは自明なことのようだが、社会的比較による自己評価を普遍的な評価とみなすと、このような推論は困難である。なぜなら、普遍的な評価で有用な比較他者は、実際の対人関係で有意な他者とは限らないからである。たとえば、Goethals & Darley (1977) の帰属論的解釈による社会的比較では、関連属性が同じであることが比較他者としての唯一の条件である。自らの数学能力を評価する状況を考えて、数学能力に関連する属性、たとえば学歴や専攻などが同じ他者であれば、どのような他者と比較しようともかまわない。言い換えるなら、関連属性がすべて同一であるならば、比較他者は互換可能である。また、自己高揚を目的とした下方比較理論 (Wills, 1981) で想定される比較他者も、自らの幸福感を増すような不幸な他者であれば誰でもよい。これらの他者は、比較他者を参照した自己評価、すなわち普遍的な評価に関連するが、比較他者との関係の中での自己評価、すなわち個別的な評価にとって有用な比較他者とはいえない。もちろん、社会的比較による自己評価が普遍的な評価と関連しないわけではない。しかし、他者との関係を極限まで捨象することで、対人関係から切り離された自己を過度に強調してしまい、社会的比較による評価対象を「独立体としての自己」に限定してしまうのである。その結果、

自己と社会との関係はおろか、自己と他者の関係を分析するのも困難になってしまったのである。

このような状況とは対照的に、相対的位置の知覚は社会関係の基盤であることが人類学者や動物行動学者らの研究によって明らかにされてきた。たとえば、他者との相対的位置に基づく序列化が人間社会の基本形式であることを主張する人類学者がいる (Brown, 1991; Fiske, 1992)。また、人間以外の種でも個体間の相対的位置の知覚は可能であることが動物行動学者によって報告されている (Grosenick, Clement, & Fernald, 2007)。これらの知見は、文化や種の違いを超えて、社会関係の基盤に社会的比較が機能していることを示唆する。

もちろん、社会心理学において、社会的比較と対人関係の様相をまったく考慮してこなかったわけではない。Locke (2003) は、人々が対人関係を認識する2次元が社会的比較と密接に関連していると主張した。対人関係を認識する2次元は、支配や地位に関連する次元と、親密さや結束に関連する次元である。社会的比較が支配や地位に関連するだけでなく、類似や非類似を確認することを通じて親密さや結束にも関連することを Locke (2003) は実証した。つまり、認識され得る対人関係の全般にわたって社会的比較が関与しているのである。

社会的比較と対人行動

人を含む社会的な動物の多くは、他個体との相互作用に多くの時間を費やしている (Dunbar, 1996)。他者との相互作用は、攻撃行動や援助行動、説得やコミュニケーションなどの対人行動を含む。他者との相互作用を基礎にして成立する心理的な結びつきが対人関係である。したがって、対人関係を検討する上で重要なのは、対人行動の生起や影響過程の分析である。そのためには、対人行動と社会的比較の関係を分析できる理論、ないしはモデルが必要である。これは、比較判断時の認知的メカニズムとは別の水準であり、相互排他的である必要はない。

本論では P. Gilbert を中心としたグループによる社会的比較の視点を導入する。社会的比較を対人行動の準備段階であるとする彼らの視点は、社会的比較と対人関係の様相を検討する上で適切である。Gilbert, Price, & Allan (1995) によると、「社会的比較は挑戦や自信を制御する (系統発生的に) 古い能力である。(p.153, 括弧内は筆者による補足)」と定義されている。これは、次のような論理で導かれる。人間を含む多くの種における社会は、性や生存に関わる資源をめぐる潜在的、または顕在的な競争の場である。個体の順位や既に所有している資源は、競争で成功するための指標となる。高い順位や資源を多く所有すること、すなわち社会的成功で重要なのは損失-利得 (cost-benefit) の分析能力である。たとえば、常に負けてしまう相手に挑戦したり、常に勝てる相手に挑戦しなかったりするのはどちらも損失である。損失や利得を分析し、最適なレベルに保つ能力が備わっていることで、他個体との相互作用で最大限の利得が得られる。そして、この損失と利得の分析能力が社会的比較ということになる。Gilbert et al. (1995) による社会的比較の定義は、動物行動学の影響を色濃く反映している。特に重要なのは、社会的比較を資源の獲得保持能力 (resource-holding potential : RHP) と関連づけたことである。RHP は競争における闘争能力や強さに相当する概念である (Parker,

1974)。

以上の議論から、多くの動物で社会的比較の基本形式は変わらないことが理解される。つまり、闘争と相対的 RHP についての動物行動学の研究は、人間以外の種における社会的比較研究である。それでは、人間に特徴的な側面は社会的比較に存在するのであろうか。Gilbert et al. (1995) は、人間の場合は直接的な RHP の比較だけで社会的に望ましい結果（社会的成功）が得られるわけではないことを認めている。人間にとっての社会的成功は、地位や権力の獲得と密接な関連がある。社会的な地位やそれに伴う権威は、自分だけでなく他者から認められて初めて成立する (Gilbert, 1990)。そこで重要となるのは、体や武器のサイズ等の直接的な攻撃を想定した RHP の比較だけでなく、他者から見た自らの魅力的な資質である。RHP はその性質上、相手を威嚇する側面を持つ。しかし、あまりにも攻撃的な威嚇は、弱いことと同様に魅力がない (Baumeister, 1982)。したがって、ほかの他者から選択的に受容される魅力的な資質が重視されるのである。これを Gilbert et al. (1995) は、RHP と区別して社会的注目保持力 (social attention holding power :SAHP) と呼んでいる。

以上の論理から、Gilbert et al. (1995) の議論は以下の3点に集約される。①社会的比較を順位制と密接に結びつけた。② RHP や SAHP の相対的な比較から自己と他者の対人関係が決定する。③そこから、さまざまな対人行動や心的状態が帰結される。Gilbert et al. (1995) によれば、社会的比較による自己と他者の関係は「優位者－劣位者」または「支配者－被支配者」であり、優位者や支配者の側から見た対人行動の基本戦略は「RHP に基づく攻撃」か「SAHP に基づく魅力」である。そして、自らが劣位者の場合に想定される心的反応が恥や抑うつなどである。

このように、地位に代表される社会関係や対人関係の形成に社会的比較が影響することを、Gilbert et al. (1995) は動物行動学の知見を援用しながら体系的に論じた。彼らの議論から、社会的比較による自己評価には2つの側面があることが導き出せる。ひとつは、相対的位置の知覚に基づく RHP や SAHP の評価であり、もうひとつは特定の対人戦略や戦術を方向づける評価である。後者は認知的な評価というよりも動機づけられた評価である。したがって、社会的比較による自己評価は比較他者に対する行動と常に不可分な関係にあることが推論されるのである。

社会的比較における第三者の役割

人間において特に重要なのは SAHP の比較であると Gilbert et al. (1995) は述べている。RHP に比べ、SAHP は多くの他者からの評価に依存する。したがって、自己や比較他者以外の広範囲な他者への影響も考慮しなければならない。つまり、自己と比較他者を取り巻く聴衆や第三者の存在が比較状況に介在するのである。Gilbert et al. (1995) は、二者間だけの比較を “pair wise comparisons” と表現しているのに対し、聴衆などの第三者を含めた比較を “triangular and audience comparisons” と表現している。つまり、自他の相対的位置を第三者が知覚、評価する可能性のある状況である。Gilbert et al. (1995) も例に挙げている嫉妬状況は、第三者が関与している典型的な比較状況である。恋愛関係の嫉妬を例にすると、自分のパートナーが第三者、ライバルが比較他者に相当する。そして、

第三者による（ライバルと自己との）相対評価が好ましくないと自己が推論した際に生起する感情が嫉妬である（Desteno & Salovy, 1995）。同様に、恋愛関係でない異性関係（Henderson-King et al., 2001）やきょうだい関係（Feinberg et al., 2000）でも第三者の影響が確認されている。このように、第三者からの相対評価は自己にとって重要な意味を持つと考えられる。

第三者の評価を推測するのは自己である。したがって、観察可能な注目や評価的言明などの手がかりは、評価される自己にとって重要である。直接的な評価的言明をフィードバックされる機会はそれほど多くないことを考慮すると、第三者が注目している対象を認識することが特に重要となる。第三者が注目する対象は複数の水準で考えられるが（遂行、能力、人物全体など）、注目の基本方向は自己と比較他者に大別できる。そこで、第三者を含めた比較状況は、第三者の注目を知覚する自己の観点から形式的に3つに分類される。ひとつは、第三者が自己と比較他者を結びつける形で注目している状況である。これは第三者が自己と比較他者を相対的に評価する事が自己にとって容易に推測できる状況である。次に、自己にのみ第三者が注目している状況である。これは、特定の比較他者に第三者が「注目していない」状況であるので、他者との相対評価は推論されない。しかし、社会的比較の準備状態として、一般的な比較傾向を高めると予測できる（Stapel & Tesser, 2001）。最後に、比較他者にのみ第三者が注目している状況である。一時的ではあれ、第三者が自己に「注目していない」状況である。したがって、もし、この状況で比較他者の遂行や特性が自己評価に影響しているのなら、「比較他者と自己が相対的に評価される可能性がある」と自己が積極的に推論しなければならない。それゆえ、社会的比較による自己評価がこの状況で顕著であれば、相対的な評価に対する第三者の影響は明確であろう。

もし、比較他者との相対的位置を自分自身だけで知覚し、評価するだけであるならば、そのような社会的比較による自己評価はあくまで個人的評価である。しかし、第三者を含む比較状況は、個人的評価ではなく社会的評価である。その論拠は、第三者に依存する不確定要素が比較状況に存在するからである。この第三者に依存する不確定要素とは、推論、決定、状況統制の3つの不確実さであり、二者間の比較状況では顕著ではない。推論における不確実さとは、「君はあの人より出来が悪い」といった、あからさまな評価を第三者が自己にフィードバックするとは限らず、多くの場合は曖昧な手がかりからの推論に頼るしかないことである。決定における不確実さとは、自分がどのように自らを評価しようとも、第三者がそれを認めない限り自己評価は確定しないことである。状況統制における不確実さとは、第三者の評価は認知的機構に「直接」アクセスすることで自分に都合の良く変更することはできず、比較状況のコントロールが相対的に困難なことである。このような不確実さは、商品の価格を決定する市場の働きに例えると理解しやすい。ここでは、第三者を含めた聴衆は市場に、自己評価は商品価格に相当する。商品価格の決定権は、商品の生産者である自己ではなく市場にある。ここから、個人的評価から社会的評価の段階に社会的比較が移行する要因は、自己にとって意味のある第三者の評価予期であることが推論される。

社会心理学の諸概念との関連：社会的価値、評価懸念、公的自己意識

Leary (2002) によれば、人間の社会的価値は支配と受容に大別される。RHP や SAHP による社会的比較の視点を用いることで、この社会的価値を統一的に説明できる。まず、RHP の相対的な比較によって自らの支配性を査定することが可能で、それに基づいた対人行動が生起する。しかし、相手を支配するための RHP に基づく威嚇は、人間社会では時に拒否されるリスクを伴う。これは、支配と受容がトレードオフの関係にあることを示している。そこで、望ましい資質を他者に示すことで、多くの他者から選択的に受容される必要がある。したがって、第三者を含む多くの聴衆が存在する状況での社会的比較が重要となる。もし、「比較他者よりも優れている」と第三者を含む聴衆の多くが評価すれば、自らが優位者であることが社会的に受容される。それにより、比較他者に対する優位者としての対人行動が社会的に正当化され、支配と受容のトレードオフを回避して自らの社会的価値を上昇させることにつながるのである。

高度に社会性を発達させた種では、SAHP による社会的比較、特に第三者などの聴衆を含めた社会的比較による自己評価は重要である。もし、このような評価プロセスがある程度内在化されているならば、トリガーとなる個人の内的特性が存在すると考えられる。たとえば、Watson & Friend (1969) は、評価懸念を「他者からの否定的評価に対する恐れ」としており、社会的不安の一つに位置づけている。評価懸念は臨床心理学や社会心理学で幅広く用いられている概念であり、特に対人場面での個人差として扱われている。すでに述べたように、第三者の評価には不確定要素が多く含まれている。また、社会には複数の人々があり、第三者となる人物は複数存在する。したがって、評価懸念傾向の高い人は、そうでない人よりも、個人的評価から社会的評価の段階に社会的比較が移行しやすい人物であると推論できる。同様に、社会的対象として自己を意識しやすい傾向に公的自己意識がある (Fenigstein, Scheier, & Buss, 1975)。社会的不安の一つである評価懸念とは違い、公的自己意識は否定的な評価のみと関係するわけではない。しかし、第三者の評価は必ずしも否定的とは限らないことから、第三者を含めた比較状況と公的自己意識は、評価懸念よりも広範囲な関連があると推論される。

結論：社会的比較の適応的意義

ここまで、社会的比較と対人関係の密接な連関を手がかりにして、社会的比較による自己評価の「社会性」について論じてきた。その際の理論的基盤として、社会的比較の本質は順位制における損失-利得の分析能力であり、それは系統発生的に古い起源であるとした Gilbert et al. (1995) の議論に依拠した。特に、第三者を含む聴衆の存在が SAHP の比較にとって重要であるとの指摘から、第三者を含めた比較状況をいくつか形式化した。その後、第三者の評価に伴う不確かさが、社会的比較による自己評価を社会的な性質に変えることを議論した。

Gilbert et al. (1995) による社会的比較の議論の根底には、進化生物学における適応概念があることは指摘するまでもない。資源獲得における種内競争が人間を含む多くの種で何らかの心の形質を選択的に進化させてきた可能性はある。そのような競争の中で、対人戦略の選択に資する社会的比較の

能力は、個体の生き残りに相対的に有利であったのかもしれない。それは、勝者と敗者の関係を固定化することにもなるが、同時に敗者の生き残りにも寄与したはずである。しかし、特に人間社会において、勝者と敗者の関係は常に一定なのであろうか。言い換えるなら、人間社会は常にパワーエリートで構成され、権力のプルーラリズムは幻想なのであろうか。この問題について、社会的比較の理論はどこまで有効な説明を提供するのであろうか。

この点について示唆的な議論を Beach & Tesser (2000) が展開している。Beach & Tesser (2000) は、人の生態的地位の特化を自己評価維持モデルで解釈した。人は、他者よりも優れている可能性のある領域で専門化する傾向があり、その際の判断に用いるのは社会的比較による自己評価である。つまり、人は相対的に自己評価を高く維持できる領域でニッチを形成するのである。このように考えれば、人間は領域の数だけ権力を分散できることになる。つまり、自らが優位者となるまでニッチを形成し続けなければよいのである。しかし、これまでの議論から、社会的比較によるニッチ形成を抑制する要因として第三者の影響を挙げることができる。第三者の評価が自分の思い通りにならないことはすでに議論した。このことは、評価領域それ自体に第三者の影響があることを示唆する。たとえば、弟である自分は野球のバッティングで兄よりも優れているが、第三者である親は自分（弟）と兄を常に勉強の成績で比べている状況を想定する。この状況で、学業成績による親の相対評価を無視することは弟にとって困難であることが予想される。つまり、人にとっての「重要な遂行領域」は社会的評価に依存しており、想定されるすべての領域でニッチを形成することが許されているわけではないのである。したがって、上記の要因を考慮すれば、人間社会における権力構造の均衡点を導き出すことも可能であろう。

このように、個人の内的過程から対人関係の様相を説明し、さらには地位や社会階層の形成などのマクロな社会状態を記述する際の理論的基盤として社会的比較は有用である。その際、社会生活への適応という観点から社会的比較を定義することは、検討すべき重要な仮説を数多く生成できる点で望ましい。今後は、このような観点から社会的比較を捉えた実証研究が必要である。

引用文献

- Baumeister, R. F. (1982). A self-presentational view of social phenomena. *Psychological Bulletin*, **91**, 3-26.
- Beach, R. H., & Tesser, A. (2000). Self-evaluation maintenance and evolution: Some speculative notes. In J. Suls & L. Wheeler (Eds.), *Handbook of Social Comparison: Theory and Research*. New York: Kluwer Academic/ Plenum. pp. 123-140.
- Brown, D. E. (1991). *Human Universals*. New York: McGraw-Hill. (ドナルド・E・ブラウン 鈴木光太郎・中村 潔 (訳) (2002). ヒューマン・ユニヴァーサルズ—文化相対主義から普遍性の認識へ 新曜社)
- Buunk, B. P., & Mussweiler, T. (2001). New directions in social comparison research. *European Journal of Social Psychology*, **31**, 467-475.
- Desteno, D. A., & Salovy, P. (1995). Jealousy and envy. In A. S. R. Manstead & M. Hewstone (Eds.), *The Blackwell encyclopedia of social psychology*. Oxford, UK: Basil Blackwell. pp. 342-343.

- Dunbar, R. (1996). *Grooming, gossip and the evolution of language*. Cambridge MA : Harvard University Press. (ロビン・ダンバー 松浦俊輔・服部清美 (訳) (1998). *ことばの起源 猿の毛づくろい、人のゴシップ* 青土社)
- Feinberg, M., Neiderhiser, J. M., Simmens, S., Reiss, D., & Hetherington, E. M. (2000). Sibling comparison of differential parental treatment in adolescence: Gender, self-esteem, and emotionality as mediators of the parenting-adjustment association. *Child Development*, **71**, 1611-1628.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. (1975). Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 522-527.
- Festinger, L. (1954). A theory of social comparison processes. *Human Relations*, **7**, 117-140.
- Fiske, A. P. (1992). The four elementary forms of sociality: Framework for a unified theory of social relations. *Psychological Review*, **99**, 689-723.
- Gilbert, P. (1990). Changes: Rank, status and mood. In S. Fischer & C. L. Cooper (Eds.), *On the move: The psychology of change and transition*. New York: Wiley. pp. 33-51.
- Gilbert, P., Price, J., & Allan, S. (1995). Social comparison, social attractiveness and evolution: How might they be related? *New Ideas in Psychology*, **13**, 149-165.
- Goethals G. R., & Darley, J. M. (1977). Social comparison theory: An attributional approach. In J. Suls & R. Miller (Eds.), *Social Comparison Processes*. Washington, DC: Hemisphere. pp. 259-278.
- Grosenick, L., Clement, T. S., & Fernald, R. D. (2007). Fish can infer social rank by observation alone. *Nature*, **445**, 429-432.
- Henderson-King, D., Henderson-King, E., & Hoffmann, L. (2001). Media images and women's self-evaluations: Social context and importance of attractiveness as moderators. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **27**, 1407-1416.
- Klein, W. M. (1997). Objective standards are not enough: Affective, self-evaluative, and behavioral responses to social comparison information. *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 763-774.
- Leary, M. R. (2002). The interpersonal basis of self-esteem: Death, devaluation, or deference? In J. Forgas & K. D. Williams (Eds.), *The social self: Cognitive, interpersonal, and intergroup perspectives*. New York: Psychology Press. pp 143-159.
- Locke, K. D. (2003). Status and solidarity in social comparison: Agentic and communal values and vertical and horizontal directions. *Journal of Personality and Social Psychology*, **84**, 619-631.
- Miller, C. T. (1984). Self-schemas, gender, and social comparison: A clarification of the related attributes hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 1222-1229.
- Miller, D. T., Turnbull, W., & McFarland, C. (1988). Particularistic and universalistic evaluation in the social comparison process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **55**, 908-917.
- Mussweiler, T., Rüter, K., & Epstude, K. (2006). The why, who, and how of social comparison: A social-cognition perspective. In S. Guimond (Ed.), *Social comparison and social psychology. Understanding cognition, intergroup relations and culture*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 33-54.
- Parker, G. A. (1974). Assessment strategy and the evolution of fighting behavior. *Journal of Theoretical Biology*, **47**, 223-243.

- Stapel, D. A., & Tesser, A. (2001). Self-activation increases social comparison. *Journal of personality and social psychology*, **81**, 742-750.
- Suls, J., & Wheeler, L. (2000). A selective history of classic and neo-social comparison theory. In J. Suls & L. Wheeler (Eds.), *Handbook of social comparison: Theory and research*. New York: Kluwer Academic/Plenum. pp. 3-19.
- Watson, D., & Friend, R. (1969). Measurement of social-evaluative anxiety. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **33**, 448-457.
- Wills, T. A. (1981). Downward comparison principles in social psychology. *Psychological Bulletin*, **90**, 245-271.
- Wood, J. V. (1989). Theory and research concerning social comparisons of personal attributes. *Psychological Bulletin*, **106**, 231-248.
- Wood, J. V., & Wilson, A. (2003). How important is social comparison? In M. R. Leary & J. P. Tangney (Eds.), *Handbook of Self and Identity*. New York: Guilford. pp. 344-366.

Self-evaluation in social comparison and interpersonal relationships

OKUBO Nobutoshi *

Social comparison is ubiquitous in social life. People learn about their own abilities and opinions by comparing themselves to others. Festinger (1954) formulated the theory of social comparison process, which emphasizes the need for accurate self-perception. After Festinger's original formulation, many researchers have focused on motivational forces and cognitive mechanisms of the social comparison process. As a result, they did not pay enough attention to the function of the social comparison in concrete social groups. In this paper, I attempt to place the comparative process in interpersonal context. To do this I review the discussion about the adaptive value of comparison with others (Gilbert, Price, & Allan, 1995). I also add my own speculations regarding the outcome of social comparison, which depend on a third person's evaluation. Finally, I considered social nature of the self-evaluation by the social comparison.

Key words : social comparisons, interpersonal relationships, self-evaluation,
social evaluation, evolution

* A graduate student in the Graduate School of Sociology, and graduate member of the Institute of Human Sciences at Toyo University